

平成 19 年 11 月 13 日

次代を担う良き教員（社会人）となるために

北斗市立大野小学校

教諭 佐々木 朗

1. 自己紹介に代えて

自分が、今、教師になろうとしている人の前で、教師のイロハを語ろうとしている。自分のどこにそんな力量があるのか。そう思いながら、今パソコンに向かっている。

この大学を25年前に卒業し、20年余たって、再びこの大学に大学院生として戻ってきた。日高の小学校で8年、恵山の中学校、七飯、そして大野と私の25年の教職員生活でいろんなことを経験してきた。



教員を長くやっていて、教員ほどたいへんでつらいことが多い仕事はないということを感じる。私が勤めた頃と子どもたち、そして保護者も変わった。当時は、田舎でこそあったが、学校の先生というものは、例え私が大学を出たてのあんちゃんであったにもかかわらず、一目おいてくれたものだ。それが、一般論ではあるが、先生の社会的なステータスが下がったのか、保護者の意識が高まったのか、どうしても保護者

の目を気にした行動をとってしまうことも多い。教員がそんな毎日の中でストレスを抱え、休職するケースもここ数年、数は伸びてきている。でも、でもである。教員ほど、楽しい仕事は他にないとも自信を持って言える。私の学級通信「ひばり」をお読みになっているだろうか。子どもたちは日々成長している。昨日できなかったことが、今日できる。勉強でも、運動でも、心でもその成長を目の当たりに見ることができるのである。滅茶苦茶忙しい毎日である。でも、子どもの「できた。わかった。」という笑顔いっぱいの表情に出会うと、教員をやって良かったと思うのである。

私は、皆さんに、学校の先生としての、また、学校の先生を目指さない方もいると聞いているので、「教員として」を「一般社会人として」に読み替えていただきながら、話をすすめていく。

2. 教員の資質として求められるもの

私は、教員に求められるものを2つ挙げる。それは、情熱と技術である。今、教員の世界では、「教員の資質の向上」というものがキーワードになっている。また、教育基本法が改訂され、国レベルでも「教育再生会議」なるものが開かれ、今後の教育のあり方が話し合われている。ご承知のように、学力低下、いじめによる自殺、家庭・

地域の教育力の低下、少子化による学校の統廃合、教員の不祥事、日の丸君が代などの学校現場の混乱など、教育現場にはあまりいいニュースがない。

その一方で、現場では、一生懸命にがんばっている先生が多数いる。一人一人の子どもの可能性を引き出し、子どもたちの「生きる力」を育てているのも我々現場の教員であることも確かである。情熱と技術。これを両刃の剣として、身に付けていただきたい。

(1) 情熱

これから、教員になろうという方は、きっと「いい先生になろう。子どもたちとたくさん遊んで、しっかりと勉強を教えよう。子どもたちにいろんな体験をさせてあげよう。子どもたちに自分の得意なものを教えてあげよう。」という気持ちを持っているに違いない。そんな純粋な情熱をいつまでも大切にしていってほしい。そして、いつでも新しいものを開拓していこうという気持ちをもち続けてほしい。「現状維持は、後退である。」ことを胸に刻んでおいてほしい。

私の初めての赴任地は、静内の山の中の小さな学校だった。たいした教育技術もなく、大学を出てすぐ赴任したわけだが、その4月から他の先生たちと同じように一つの学級をまかされるわけである。うまくいくわけがない。クラスはがちゃがちゃであった。でも、私は、情熱だけはあった。情



熱だけでやっていたのかもしれない。今でも最初に受け持った子どもたちの名前は全て言えるし、結婚式の度に、同窓会が開かれ、私は必ず呼ばれる。そんな付き合いがずっと続いている。

(2) 技術

情熱だけでは、子どもたちは満足しない。すぐれた教育技術を持ち合わせて、子どもたちに「なぜだろう。」と思わせ、子どもたちの優れた考えを引き出し、子どもたちにしっかりとした学力や体力をつける。教員はそうした指導技術を持っていなければならない。自分の頭の中に、いかにたくさんの引き出しがあって、いかに整理されているか、それが、指導力のある教員になるか、そうでないかの分かれ目となる。

初めて教員になった時、まず、最初の何年かは、とにかく先輩の真似をすること、そして、わからないことは自分から聞くことを大切にしてほしい。教えてくれるのを待とうなどと思てはいけない。みんな忙しいのだから、新卒の先生にかまっている余裕はないのである。でもこちらから、聞きまくれば、諸先生の引き出しから、一つ二つを教えてもらえるに違いないのである。

もう一つ、技術で話すことがある。それは専門性を鍛えるということである。絶対人の負けないものを持ってほしいということである。私は、全部のことにそこそこできる先生よりも、弱い分野があっても、ものすごく詳しい分野を持っている人の方がうまくやっているとと思っている。私は、情報教育、教育の情報化の専門である。コンピュータを使った仕事については、絶対に負けない自信がある。児童へのコンピュータ指導、ワードエクセルを使った事務処

理、職場のネットワークの構築、何でもできる(と思っている)。職場にはいろんな専門家がいる。そういった先生方の持ち味、専門性がうまく組み合わせられた時、学校全体として素晴らしい力を発揮できるのである。

3. 学生のうちにすべきこと

私は、大学生の4年間が一番自由に使うことができる時間を持っていると思っている。バイトに没頭することもできるし、サークルに情熱を燃やすこともできる。また、勉強する時間もいくらでもある。

私は、大学時代にコンピュータの勉強を始めた。当時は、コンピュータに漢字が出る少し前の時代であった。コンピュータを動かすには、プログラムを組む力が必要だった。教育心理学の一般実験をみんなが電卓でやっていた時、私は、コンピュータを使って何とかならないかと考え、BASICを徹底的に勉強した。勉強には時間がかかったが、そのプログラムを使うと、データをいれると一瞬うちに表になって答えが出てくるのである。私は4年間、コンピュータを勉強続けた。(心理学の内容についてはさっぱりだったが)それが、私の今を作り上げている基礎になっている。学校の先生になってからも、算数の勉強でコンピュータを使った計算練習プログラムを作り、全国入賞を取ったこともある。当時小学校にコンピュータなど入れることを考えられなかった時代に、最先端の設備に入った学校に勤めることができた。そして、今でも先生方の教育の情報化の推進役の一人として、活動するに至っている。

自分の専攻の専門分野もよし、興味をも

った分野でもよし、サークルでもよし。繰り返すが、絶対に人に負けないものを身に付けてほしい。

4. 企画力を身に付けること。



「現状維持は、後退である。」前にも述べたが、新しいことを作るのは、非常に多くのエネルギーを要する。また、やっていたことを切るのはいとも簡単である。私は皆さんに、新しいことを始める企画力を身に付けてほしいと思う。自分で企画し、一つのことをやり遂げた時、一番の喜びを得ることができるのも、一番力が付くのも自分自身である。

私は、教職についてから、述べたように教育の新しい分野に挑戦していく環境におかれた。コンピュータを使った授業設計など、回りの人に聞いても誰も答えてくれない。だから、数少ない書物による情報とあとは、自分の企画力であった。最初の頃は、たいしたことはできなかったかもしれない。でも、経験が自分をたくましくしていく。

教員の世界はまだまだ保守的であるという現実がある。そういう中で、皆さんには企画力を身に付け、しっかりと会議で通るような企画書が書けるよう自分を鍛えてほしい。



私は、最初の時間の自己紹介でも述べたが、40を過ぎて大学院に来た時、どうしても玄関前のイチイの木にイルミネーションをつけたくなくなった。遺愛高校や未来大に負けたくなかった。それで仲間を集めて、先生方からたくさんの寄付をもらって、見事にクリスマスには小雪の中で美しく輝くホワイトイルミネーションを点灯することができた。冷やかな言葉も浴びせられた。でも、学生たちはみんな点灯式に集まって、大きな声でカウントダウンをすることができた。びっくりドンキーで携わった学生みんなに、ご飯をご馳走しながら、「生きてる」ってことのすばらしさを感じたし、その気持ちは携わった学生も同じだと思う。

人のあとをついていくという生き方もあるが、心が身震いするような喜び、嬉しさを企画力を鍛えることによって、味わってほしい。

5. 人間を磨くこと。

「教育は人なり」、「教育にとって最大の環境は教師自身である。」、「育てたように子は育つ。」などという言葉聞いたことがあるだろうか。子どもは教師の後ろ姿を見て育つ。皆さんも人間としての魅力を磨いてほしい。

私の学級通信にも書いたが、子どもたち

は、いいと思ったことは、どんどんやりなさいと教えている。私の名刺の裏にも「人生で後悔するのは、してしまったことではなく、しなかったことである。」と書いてある。おせっかいに思われるかもしれない、自分がやらなくても誰かがきつとやってくれる、そんな思いから一歩立ち進んで、「よし、それなら、自分がやろう。」という気持ちを持ってほしい。

挨拶、人への優しさ、大学への愛校心、学ぶ意欲、師を慕う心、自分を鍛える心などなど…。いずれも、今の自分から、一歩前へ出る勇気が必要だろう。でも、ほんのちょっとでもいい、行動として示すことができたなら、それは、相手へも伝わるし、自分自身を高めることになる。そして自分への自信を高めていくことにもなっていくのであるから。

